

# 村上春樹『ノルウェイの森』と 林少華译《挪威的森林》 —事例研究としての考察—

藤 田 昌 志

村上春樹《挪威的森林》和林少華汉译《挪威的森林》

FUJITA Masashi

## 【摘要】

本研究以村上春樹《挪威的森林》和林少華汉译《挪威的森林》为资料从日汉的角度来考察日语表现和汉语表现的关系。我曾经根据理性分析和分类对日语表现和汉语表现进行过对照研究。本研究在以往研究的基础上，进一步从具体翻译作品(日→中)的文体这个角度出发，对两者的关系进行事实求是的、具体的分析。本文着重揭示语言转换(日→中)里的被动表现和使役表现的语言事实。

キーワード：理論と実際 転換(日→中) 受身表現 使役表現

## 1 序

本研究は村上春樹著『ノルウェイの森』<sup>(1)</sup>とその中国語訳作品、林少華译《挪威的森林》<sup>(2)</sup>について対照表現研究を行うものである。筆者は(2007)『日中対照表現論一付：中国語を母語とする日本語学習者の誤用について』白帝社刊(以下、拙著(2007)と略す。)で理性的分析、分類による日本語と中国語の表現面における対照分析(日→中を基本的考察とする)を行っている。今回は具体的事実、具体的実際による日中対照表現論(日→中を基本的考察とする)を考察し展開することにした。「理論」と「現実」、competence と performance などこうした局面を均等に分析、考察、研究することはバランスのとれた言語の全体像を明らかにするための必須の研究であると考え。日本語の資料としては今後、現代小説だけでなく新聞の文章や公的文章なども対象として扱い、日中対照表現の具体的事実、具体的実際の全体像を明確にしていく必要がある。

## 2 先行研究、研究方法等について

拙著(2007)では分析方法として加訳(日→中)、減訳(日→中)、転換(日→中)、意識(日→中)という概念を導入した。詳しくは拙著(2007)をご覧ください。加訳(日→中)は中国語表現の明示性(=日本語表現の非明示性)を、減訳(日→中)は日本語表現の明示性(=中国語表現の非明示性)を特徴とし、転換(日→中)は受身や使役、語順、反語、動作主中心表現と事物中心表現について二項対立的、つまり+-的な特徴がみられる場合を指す概念である。意識(日→中)については直訳(日→中)に対する概念であるが、本稿では紙幅の関係もあり基本的に取り扱わない。

村上春樹著『ノルウェイの森』については林少華訳以外に数種類の訳本が出版されており、台湾では頼明珠譯《挪威的森林》(上)、《挪威的森林》(下)時報文化出版企業股份有限公司(筆者の手元には二版四十一刷2011年2月8日版がある)が出版されているが、基本的に直訳に終始しており、日本語表現とそれに対応する中国語表現の特徴を把握、分析、研究するにはなじまないで採用しなかった。

「事」(具体的事実、具体的実際)の対照表現研究は今回の文学作品だけでなく、他のジャンル(たとえば新聞記事、コラム、法律文等)のものも分析対象とすることによって、より豊かで客観性の高い研究が集積されていくように考えられる。「事」の日中対照表現研究の深化によって日本語と中国語の表現上の特徴が「理」(理性的分析)とともに明らかになり対等、平等の言語観が確立されることを願ってやまない<sup>3)</sup>。

## 3 総論

全体的構成、また、次の4.各論以外で述べておくべくことについて以下、説明する。

次の4.各論では『ノルウェイの森』→《挪威的森林》を分析、考察した結果、転換(日→中)が加訳(日→中)や減訳(日→中)よりも特徴的であることが判明した(=数量が多い。以下、( )内の数字は用例数。)ので転換(日→中)について詳しく分析、考察を行う。具体的には**4.1 転換(日→中)(368)**は**4.1.1 受身(143)**、**4.1.2 使役(145)**、**4.1.3 反語(中)(43)**、**4.1.4 語順(24)**、**4.1.5 動作主中心表現と事物中心表現(13)**に分かれる。また、続いて**4.2 加訳(日→中)－副詞・接続詞類を中心に－(124)**、**4.3 減訳「ようだ」－(比況)(11)(様態)(10)－(21)**、**5.結語、[注]、[引用文献・参考文献]**という全体構成になっている。紙幅の関係から本稿では4.1.3 反語(中)(43)以下は扱わない。**4.1 転換(日→中)(368)**のうち、**4.1.1 受身(143)**、**4.1.2 使役(145)**のみを扱う。『ノルウェイの森』の受身表現や使役表現がどのような中国語表現と対応するかを個別、具体的、実地的に研究、考察するのが本稿の主眼である。

4.1 転換（日→中）(368) では 4.1.1 受身 (143) の下位分類として 4.1.1.1 受身（日）→非受身（中）(126) (1.意識 (39) <sup>4)</sup> 2.非受身 (=「する」(日)) (32)、3.存在文 (20)、4.主観転換 (15)、5.状態補語 (9)、6.非受身（中）=使役 (7)、7.“把”字句 (4))、4.1.1.2 非受身（日）→受身（中）(17) が存在する。また、4.1.2 使役 (145) には次の下位分類がある。4.1.2.1 非使役（日）→使役（中）(121) (㉠～㉤。詳しくは 4.1.2.1 の分析、考察を参照。)、4.1.2.2 使役（日）→非使役（中）(24)。

4.1.1 受身 (141) については 4.1.1.1 受身（日）→非受身（中）(126) が数量も最も多く、この項での中心となる。2.非受身 (=「する」(日)) (32) や 4.主客転換 (15) は拙著 (2007) 以来の問題点である。4.1.2 使役では 4.1.2.1 非使役（日）→使役（中）(121) が数量も多く、この項の中心となる。総じて対照的に考察した結果では、受身表現は日本語のほうが多く、使役表現は中国語のほうが多い。この認識は実践面では中国語教育、日本語教育両方において重要である。

次に、4.各論では扱わない受身表現—受身（日）→受身（中）(111)、使役表現—使役（日）→使役（中）(71) について述べてみたい。

受身表現—受身（日）→受身（中）(111) について。

表現		『ノルウェイの森』		合計 (個数)	総 計
		上	下		
“被”字句		42	36	78	111
その 他	1 给	8	6	14	33
	2 让	4	2	6	
	3 受 (到)	4	2	6	
	4 遭	1	2	3	
	5 由～	1	1	2	
	6 挨	0	1	1	
	7 讨人喜欢	1	0	1	

受身（日）→受身（中）となるのは総計 111 例であり、“被”字句が全体の 78 例、約 70.3% と圧倒的に多い。また“被”字句の動詞部分は二字の〔動詞+補足成分〕のものが非常に多い。(ex.「部屋のドアの名札も外されて、僕のものだけになっていた。」(『上』 p.103)) → “房门上的姓名卡片也被揭去，只剩下我自己的。”(p.64) 林少华 (2007) の頁を表す。) <sup>5)</sup> (次のような場合は二字の動詞のように思えなくても前後のものに合わせて二字のまと

まりと考えられるもの (ex. “被迫”、“被人说是”、“被～一劝”、“被风一吹”) である。○「大学が封鎖されて講義はなくなったので、～」(『上』 p.89) → “大学被迫关门后没有课上了, ～” (p.55) ○「しゃべり方が変わっているなんて言われたのは本当にそれがはじめてだったのだ。」(『上』 p.113) → “说话方式被人说是与众不同, 这还真是一遭。” (p.70) ○「そう言われると私、それ以上何も言えなかったわ。」(『下』 p.31) → “被他如此一劝, 我不好再说什么了, ～” (p.209)、○「～、それが風に吹かれて山の斜面を彷徨していた。」(『下』 p.40) → “～、被风一吹, 在山坡前彷徨不定。” (p.214。) その他については“给”が最も多く“叫”がないのが注意を引く。意味上の受身文については表にはないが『上』6例、『下』6例、計12例ある。(ex. 「その手紙は直子あてに転送される」(『上』 p.87) → “那封信总会转递到她手上。” (p.54。)) 意味上の受身文については受身としての明確なマーカーがないこと、提題化との関係もあり、表から外した。)

使役表現——使役(日)→使役(中)(71)について。

『ノルウェイの森』		上	下	合計	総計
表現	順位				
1	让	12	18	30	71 (例)
2	使	15	12	27	
3	叫	1	6	7	
4	给	2	3	5	
5	请	0	1	1	
6	令	0	1	1	

“让”の方が“使”よりわずかではあるが多用されているのは注意を引く。“让”は「変化の過程」に重きを置く。それに対して“使”は「変化の結果」に重きを置き、「結果がすでに現れるのが普通」である。“使”は“X使Y・V”において「Yが自らの意志で行うことができず、なんらかの働きかけによって、ある作用をするようになったという意味」を表している、いわゆる「原因の使役文」である<sup>6)</sup>。

以下、各論に移る。

## 4 各論

### 4.1 転換（日→中）について

#### 4.1.1 受身表現について

受身表現は4.1.1 受身（日）→非受身（中）（126）と4.1.1.2 非受身（日）→受身（中）（17）に分かれるが、前者が126例に対して、後者は17例と、前者の方が圧倒的に数量としては多い。このことは日本語の受身表現が中国語では受身表現として表現されないことが多いことを物語っている。3.総論で言及した受身表現—受身（日）→受身（中）（111）が総計111例（意味上受身文を加えると123例）あったことを考慮に入れると、日本語の受身表現が中国語の受身表現になる確率は45.3%で、実に約55%が中国語の受身表現と対応しないのである。次に、この不对応の実態（=具体的事実=「事」）について考察したいと思う。

##### 4.1.1.1 受身（日）→非受身（中）について

受身（日）が非受身（中）になる場合については、以下の7つに下位分類される。

#### 受身（日）→非受身（中）（126）

No.	下位分類	上	下	合計
1	意識	14	25	39
2	非受身（中）（= <u>くする</u> ） （日）	24	8	32
3	存在文	12	8	20
4	主客転換	8	7	15
5	状態補語	7	2	9
6	非受身（中）=使役	3	4	7
7	“把”字句	4	0	4
				総計 126

1.意識（39）については39例あり、トップである。

- (1) 「こうして会いに来てくれたことに対して私はすごく感謝しているんだということ  
とをわかってほしい。とても嬉しいし、——救われるよ。」（『上』 p.20）  
“对你这样前来看我，我非常感激，非常高兴，真是----雪里送炭，～”（p.11）

こうした成語や成句、よく使われる慣用表現を使用したり、「入院費は実質的には免除されている」(『上』 p.199) → “住院费才实际上等于免了, ~” (p.129) など意味を説明的な中国語にする場合である。

**2.非受身(中)(=くする)(日)**(32)とは、その日本語の受身に対応する中国語を日本語に再び訳すと「~する」という形になるものである。

(2)「外界から遮断された静かな世界」(『上』 p.179)

“同外界隔绝的寂静世界”(p.115)

「今使われているのは~」(『上』 p.196) → “现在使用的”(p.126)、「原則的にはそれは許可されていないの」(『上』 p.208) → “原则上是不允许的”(p.134)、「ここはC地区と呼ばれているところで、~」(『上』 p.209) → “这里称为C区,~”(p.134)などの類例がある<sup>7)</sup>。もっとも次例になると、「意味上の受身文」なのか非受身(中)(=くする)日)なのか判然としないところがある。「私のような立場に置かれて何カ月も治療を受けていると、いやでも多かれ少なかれ分析的になってしまうものなのです。」(『上』 p.179) → “但处在我的境地,接受了几个月治疗之后,喜欢也罢,讨厌也罢,难免多多少少受到分析的熏染---”(p.114)。

**3.存在文(中)**(20)は文字通り中国語が存在文になるものである。①V<sub>1</sub>+着(11)②V<sub>2</sub>(6)③V<sub>3</sub>+了(2)④V<sub>4</sub>+上(1)と①V<sub>1</sub>+着(11)が11例と最も多い。V<sub>1</sub>を含む①には次のようなものがある。「セットされている」(『上』 p.17) → “放着”(p.17)、「~りんごのマークが大きく印刷されていた」(『上』 p.140) → “(背部还)印着一个大大的苹果商标。”(p.89)、「きちんと揃えられて並び」(『下』 p.10) → “~整齐排列着~”(p.196)、「頭には白い包帯がまきつけられ」(『下』 p.71) → “头上缠着白绷带,~”(p.235)。②V<sub>2</sub>(6)には「草花が植えられ」(『上』 p.209) → “→ “种植花草”(p.134)、「まわりを林に囲まれた」(『上』 p.290) → “四面围有树林的草地。”(p.185)、「空は~雲に覆われ」(『下』 p.33) → “天空~, 布满乌云,”(p.210)、「ソースがかけられていた」(『下』 p.123) → “上面淋有调味汁”(p.268)などの例がある。③V<sub>3</sub>+了については「~女の子が千人近くあつまられてるの。」(『上』 p.127) → “这样的女孩子搜罗了差不多一千个。”(p.80)、「直子のために保存されていたのだ。」(『下』 p.242) → “~为直子保留了~”(p.344)という例があった。④V<sub>4</sub>+上には「スズキの皿が置かれ」 → “~面前各放上一盘鲈鱼,~”(p.268)という例があった。「着」「了」「上」の有無など問題となるが“印”“放”“保留”などは日本語の受身に対応する(非受身)の存在文の動詞としてよく見受けられるものである。

**4.主客転換** (15) については拙著 (2007) で“被”字句との使い分けについて“問”や“跟到”をめぐって考察した<sup>8)</sup>が「被害・不本意」の意味を表すかどうかではなく「名詞のランキング」の面から考察するとどうなるであろうか。日本語では3種の名詞は次のようなランキングを作っている。一人称代名詞>人間名詞>無生物名詞<sup>9)</sup>。これは日本語受身文の場合にも援用できる。主客転換(日→中)15例のうち、実に13例が「(私が) V(ら)れる」という「私」(「あなた」「人」を二つ含む)を主語とする受身文である。このことは名詞ランキングから言って首肯できることであるが、それが中国語では主客転換として表現されるということは、中国語の当該動詞が動作の受け手の「私」を主語とし受身にすることになじまない、更にいえば動作主の動作性が強い動詞(中)であると考えられるのである。13個の動詞とは次のようなものである。“流露”(敬意を「払う」)、“推给”(押し出す)、“叫”(名前を「呼ぶ」)、“说”(「言う」(2))、“告诉”(「言う」(2))、“夸”(「ほめる」)、“强加给”(押しつける)、“理解”(理解する)、“关怀”(かまう)、“劝”(誘う)。いずれも主語(中)は「人」(=「第三者」)となっている。(ex. 「～、そのせいで僕はよく知りもしない人間からちょっとした敬意を払われまでした。」(『上』p.68) → “～,甚至素不相识的人都对我流露出一丝敬意。”(p.42)、「だって石田先生に会って言われてきたから」(『上』p.197) → “可是人家告诉我找石田老师呀!”(p.127) etc.)「敬意を払われる」の例は中国語文が「間接目的語の主語化の回避」<sup>10)</sup>となっている例であるが、実際の例はそれほど多くないようである。(「理」性的認識としては存在するが「事」実として少数という例である。)他の2例は「料理が運ばれてきた。」(『下』p.123) → “侍者端菜进来。”(p.268)、「～、レモンのシャーベットとエスプレッソコーヒーが運ばれてきた」(『下』p.126) → “～, 端来柠檬汁和蒸馏咖啡。”(p.271)といずれも主語(中)は「ウェイター/ウェイトレス」という動作主で、使用されている動詞は動作性の強い動詞“端”である。日本語が「料理」やメニュー名(レモンのシャーベットやエスプレッソコーヒー)を主語とすることに抵抗がないのは英語の翻訳の影響であろう。「名詞ランキング」といってもそうした点に注意を払う必要がある。主客転換(日→中)とは動作主の動作性が強い動詞(中)によって引き起こされる現象のように考えられる。主客転換(日→中)については今後も考察を続けたい。

**5.状態補語** (9) については9例のうち、6例が「～は(よく)手入れされている」→ “～(修)剪得”であることに注目したい。「植木」(“草木”)や「髪」(“头发”)、「植え込み」(“观赏树”)がどのように手入れされているか、という表現を中国語は好むのである。(ex. 「～、植木はよく手入れされていた。」(『上』p.192) → “～, 草木都修剪得整整齐齐。”(p.123)、「その短かくカットされた髪が」(『下』p.171) → “那剪得短短的秀发”(p.299) etc.) 残

りの3例も「雨戸が閉ざされる」(『上』p.87) → “木板套窗关得～”(p.54)、「肉体が～完成されている」(『上』p.271) → “～肉体完成得～”(p.173)、「机の上は(きちんと)整理され」(『下』p.175) → “桌子拾掇得(整整齐齐),”(p.302)で日本語は受身表現であっても中国語は状態を描写する表現となっている。

6.非受身(中)–使役(7)は中国語表現が使役表現になるものである。日本語は名詞ランキングによって「私」や人間名詞を優先して主語として使用するが、中国語は原因となる人・物・事を中心として表現することが可能なこと、またそれを好むことが使役表現を採らせることとなっている。

(3)「ここにいる限り私たちは他人を苦しめなくてすみませし、他人から苦しめられなくてすみませ。」(『上』p.182)

“只要身在这里，我们便不至于施苦于人，也可以免使别人施苦于己。”(p.160)

(4)何かひどいことされたんですか？(『上』p.251)

“她做什么让你做难堪的事？”(p.116)

(3)では「私たち」が「他人から苦しめられなくてすみませ」という日本語を中国語では「ここにいる」事が「他人が私たちに苦しめる」ことを「サセナイ」(“免使”)ようにするという、原因の事柄を主語とする使役の表現に変えている。(4)は間接目的語の主語化の回避(中)でもあるが、「ひどいこと」(日)を中国語では“让你做难堪的事”(「あなたを耐えがたくさせる事)」と使役を含む表現に変えている。

7.“把”字句(4)は動作主を主語に立て、目的語を処置する対象として“把”で動詞の前に置くものである。すべて主語が「私」である日本語の受身文が中国語では“把”字句で表現されているものである。次のような例である。「警察に呼ばれる」(『上』p.52) → “警察～把我叫去了～”(p.31)、「(親に)あそこに入れられちゃった」(『上』p.126) → “父母～把我塞去那里。”(p.79)、「(親に)あんな学校に入れられちゃった」(『上』p.295) → “父母～把我送入那样的学校：”(p.188)、「(僕のようなこれといって特徴もない男が)永沢さんの個人的な友人に選ばれた(ことに対して)」(『上』p.68) → “(当)永泽把我这个平康无奇的人选为他的私人朋友后～”(p.42)。

#### 4.1.1.2 非受身(日) → 受身(中)(17)について

非受身(日)が受身(中)になる場合については、17例あるが、日本語表現は自動詞の表現が多い。「あの人たちは私のことですごく混乱していて～」(『上』p.184) → “他们被



我攪得心慌意乱，～” (p.117)、「世界中のすべてが赤く染まっていた。」(『下』 p.131) → “凡是目力所及的东西，无不被染成了红色，～” (p.274)。日本語が大きくは「ナル」的表現を好み、中国語が「スル」(・「サレル」) 的表現を好むことに起因するのかもしれない。もっとも次のように、名詞ランキングの相違によって日本語が非受身で中国語が受身になる場合も存在する。「その週の半ばに僕は手のひらをガラスの先で深く切ってしまった。」(『下』 p.108) → “这星期刚过一半，手心被玻璃片划了一道很深的口子。” (p.259)。中国語では身体部分 (ex.上記「手のひら」「髪」「眼 etc.) を主語にしても何ら問題はない好例である。

#### 4.1.2 使役表現について

転換 (日→中) の中の 4.1.2 使役表現については 4.1.2.1 非使役 (日) →使役 (中) (121) と 4.1.2.2 使役 (日) →非使役 (中) (24) に分かれる。前者が 121 例に対して、後者は 24 例と前者の方が圧倒的に多い。このことは日本語の非使役表現が中国語では使役表現として表されることが多いことを物語っている。3.総論で言及したように使役表現－[使役 (日) →使役 (中)] が総計 71 例あったことを考慮に入れると、日本語の使役表現が中国語の使役表現になる確率は  $71/95 \approx 74.7\%$  であるが、使役表現 (日) 自体が翻訳調の文体であること、また非使役 (日) →使役 (中) が 121 例と使役 (日) →使役 (中) の総計 71 例を凌駕していることを考えれば、使役表現について日中語間で主要で特徴的なのは非使役 (日) →使役 (中) の表現であると言えよう。少なくとも村上春樹『ノルウェイの森』と林少华译《挪威的森林》の関係についてはそのことが言える。

##### 4.1.2.1 非使役 (日) →使役 (中) (121)

《挪威的森林》の使役表現 (中) のマーカの使用頻度の表は以下のものである。

##### 非使役 (日) →使役 (中) の使役 (中) のマーカについて。

順位	表現マーカ	上	下	合計	総計
1	让	16	25	41	121 例
2	使	16	20	36	
3	叫	10	12	22	
4	令	15	7	22	

使役表現－使役 (日) →使役 (中) の表 (3.総論の表) 同様、“让” が“使” より使用頻度が高いのは興味深い事実である。

非使役（日）→使役（中）は、次の㉔～㉑（使用頻度順の（ ）内の数字は使用数。）に分類される。

㉔

<b>自動詞的表現（日） → 使役表現（中）</b> 〔AがVする〕“使（让/叫/令）・V”（A：人・物・気 etc）
--

次のような例がある。

(39例)

(5) 「頭がはりさけてしまわないように～」（『上』 p.8）

→ “为了不使脑袋胀裂～”（p.3）

次の二つの例を見ていただきたい。「でもそんな風に僕の頭の中に直子の顔が浮かんでくるまでには少し時間がかかる」（『上』 p.11）→ “但是使直子的面影在我脑海中如此浮现出来，总是需要一点时间的。”（p.6）。「鳥が出ないように注意しながら檻の中に入って汚物を洗いおとし、～」（『上』 p.274）→ “在注意不让鸟跑出的同时进入栏内，清洗脏物。”（p.175）。前例では（“X 使 YV” の形で）“Y”（= “直子的面影”）の「動作の実現を含意する使役動詞」= “使”<sup>11)</sup> を使用し、後例では（“X 让 YV” の形で）“Y”（= “鳥”）の「動作の実現を含意しない場合の使役動詞」“让” を使用して使い分けしている。“使” の場合、「自然に～する」場合に使用され Y の意志性はないが、“让” の場合、Y の意志性が存在するのである。

㉑

<b>〇をVする（日） → 使役表現（中）</b> =（Vさせる） “使（?/叫/令）〇・V” （物・人に〇をVする（日）→ “使（让/叫/令）〔物・ =（Vさせる） 人〕VO”（中）を含む）
---

(35例)

(6) ～することによってある種の病を治癒することが可能だというのがその医師の理論だったの。（『上』 p.200）

→ “那位医生的理论是，从而使某种病得到彻底治疗。”（p.128）

「治癒する」=「治癒させる」と使役性を持つ表現にすれば中国語との対応は理解しやすくなる。「僕をひきつける」（『上』 p.225）→ “使我为之倾心”（p.144）、「（自分の良い面を見せる）」（『上』 p.260）→ “让你看他好的那方面”（p.166）、「感情を静める」（『下』 p.14）

→ “使感情平静下来” (p.198)、「頭の中を空っぽにする」(『下』 p.95) → “让脑袋处于真空状态” (p.250)、「見せてあげる」(『下』 p.169) → “让他看” (p.298)、「話をする」(『下』 p.218) → “使他说话” (p.329) などの最初の日本語は「～サセル」の形に言い換えられ、中国語も使役表現が対応していることがわかる。

◎

<p>(人) <b>がイ</b>形容詞 (日) → 使役表現 (中)  <b>ナ</b>形容詞 (日) “使 (让/叫/令) A・Adj.etc”</p>
---

(31 例)

(7) 「あなたがそう言ってくれて私とても嬉しいの。本当よ。」(『上』 p.16)

“你这样说，太叫我我高兴了，真的。” (p.16)

(8) 「事態がどれほど絶望的に見えても、どこかに必ず糸口はあります。」(『下』 p.223)

“无论事态看上去多么令人悲观，也必定在某处有突破口可寻。” (p.332)

(7) はイ形容詞「嬉しい」の使役表現 (中) 例、(8) はナ形容詞「絶望的」の使役表現 (中) 例である。この他、「哀しい」→ “令人悲哀”、「(気持ち) 明るい」→ “叫人高兴”、「辛い」→ “叫人难受”、「変だ」→ “让人生疑”、「大好き」→ “叫人喜欢”、「重苦しい」→ “令人窒息”、「可愛い (顔)」→ “叫人怜爱”などの例があった。いずれも中国語の文学作品などでよく見受ける表現である。

以上の①②③の三つで全体 121 例の 105 例、約 84.3%を占める。以下の④～⑤は各 5 例のものである。

④

<p><b>AがBにVして (くれ)</b> → “<b>A让B・V</b>” (中)  <b>〔命令・依頼〕</b> と言う (日)</p>
---

(5 例)

(9) お母さんが夕食の支度していて、もうご飯だからお姉さん呼んで来てって言ったの。(『上』 p.298)

母亲正在准备晚饭，让我叫姐姐吃饭。(p.190)

(10) 私すぐみんなのところに行って手わけして直子を探してって言ったの。(『下』 p.275)

我马上跑去大伙那里，让大伙分头去找直子。(p.365)

(9) は「人」が「私」に言う場合、(10) は「私」が「人」に言う場合である。5 例すべて“让”を使用している。他の 3 例は以下のものである。「(私は) FM 放送をつけてくれと言った。」(『上』 p.287) → “～，再次让她打开立体声短波，～” (p.183)、「横になりなさいと私言って」(『下』 p.17) → “～，让她过来躺在我的床上。” (p.200)、「キウリ買ってくれなんて言わなかったわよ」(『下』 p.74) → “根本没让她买什么黄瓜，真是。” (p.236)。

㊦

抽象的表現 (日) → 具体的・説明的表現 (中)  
【使役表現】(中)  
(= (人) を V サセル)  
“叫／使 (人) V～”

(5 例)

(11) あなたは今日私にすごくひどいことをしたのよ。(『下』 p.212)

“你做了件十分使我伤心的事。” (p.324)

拙著 (2007) の「意識 (日→中) について」<sup>12)</sup> で間接的表現 (日) の直接的表現 (中) への意識とともに「抽象的表現 (日) の意識」<sup>13)</sup> として「それに破れる」→ “離婚”、「それもそうだと惇一は思いながら、～」→ “惇一虽然觉得初美的话不是没有道理，～” などの例を挙げて論じたが㊦は具体的・説明的表現 (中) が使役の場合である。他には次のような例があった。「僕は緑の父親がわけのわからないことを言ったのを思いだした。」(『下』 p.97) → “我想起绿子父亲说的叫我摸不着头脑的话来。” (p.251)、「彼女からもあなたにくれぐれもよろしくということですよ」(『下』 p.177) → “她再三让我向你问好。” (p.303)

㊦

A (人) が～になる (日) → “使A～” (中)  
～くなる

(3 例)

(12) 「それで僕はちょっとわけがわからなくなった。」(『上』 p.85)

“这倒使我有点不解了。”(p. 52)

㊦は心理的变化を表すものである。

「(両親に会いたくないのは) あの人たちは私のことですごく混乱していて、会って話をしても私はなんだか惨めな気分になるばかりだからです。」(『上』 p.184) → “他们被我搅得心慌意乱，见面交谈恐怕也只能使我恹惶不安，～”(p.117)、「キズキのことを思い出さなかったことで、僕は彼に対してなんだか悪いことをしたような気になりました。” “打桌球时居然未想起木月，这使我感到似乎做了一件对不起他的事。”(p.283)。

以下はその他に含まれるものであるが、便宜上、㊢ (2例)、㊦ (1例)、㊩ (1例) としておく。

㊢ (2例) は **Vする(日) → “让人・V(中)” [説明的]** の形をとるもので、次のような例がある。「僕はウェイターを呼んで四杯めを注文した。」(『下』 p.52) → “我叫过男侍，让他拿第四杯。”(p.222)、「緑は～、トム・コリンズのおかわりとピスタチオの皿を頼んだ。」(『下』 p.152) → “绿子～，让他再来一杯汤姆格林斯酒和一碟开心果。”(p.287)。中国語の表現は説明的なもの(ex. 「注文する」 → “让他拿”(=「持ってこさせる」)、「頼んだ」 → “让他再来”(=「持ってこさせた」)となっている。

㊦ (1例) は **人がOをVする(日) (→人にOをVさせる) → “使人VO(中)”** という形をとるものである。例は次のようなものである。「唯一の問題は現実の社会に復帰する勇気を彼女がとり戻すことだという風に思っていたのだ。」(『下』 p.203) → “～，便以为唯一的问题无非是使她重新鼓起回归现实生活的勇气，～”(p.319)。興味深いのは日本語表現が「彼女」が「勇気をとり戻す」と彼女の意思中心の表現であるのに、中国語表現が使役表現となり、「私」が彼女に勇気を「とり戻させる」表現となっていることである。この方が中国語的表現なのであろう。

㊩ (1例) は **(話し手)が[受益する](日) (→あなたにVさせる) → “让你V(中)”** という形をとるもので次のような例があった。「こちらこそごちそうになっちゃったし」(『下』 p.148) → “～，倒是让你破费招待。”(p.284)。この場合、話し手の「受益」は相手の「損失」の結果であると中国語では表現している。

#### 4.1.2.2 使役(日) → 非使役(中) (24)

この場合の非使役(中)とは意識(中)と考えてもよい。全体で24例あった。

(13) 「新入生の女の子を感心させて、～」(『下』 p.67)

“～,博取新入学女孩的好感, ～” (p.232)

(14) 「～昼ごはんを食べさせてもらったが、～」(『下』 p.181)

“我～吃过一次午饭, ～” (p.306)

(13) は一般的な意識(日→中)の例である。(14) については「使役」+「～てもらう」構文が一つになったものである。拙著(2007)「転換(日→中)について」の五、「～てもらう」構文の中国語への転換<sup>14)</sup>でも論じたが、「～(さ)せてもらう」=「～する」となるので、この「食べさせてもらう」=「食べる」=“吃过一次午饭”となる。類例に「私も読ませてもらっています。」(『下』 p.222) → “我看了” (p.331)があった。

## 6 結 語

以上、村上春樹著『ノルウェイの森』とその中国語訳作品林少华译《挪威的森林》について拙著(2007)の分析手法、分類に従って考察してきた。具体的な日本文学作品とその中国語訳を日中対照表現論の視点から体系的、全体的に考察した研究は過去に類例が小さいと思われる。今後、個別の日本文学作品とその中国語訳を日中対照語学的に分析する研究者が陸続と出られんことを心より切望する次第である。かつて文学作品の文体論が注目されたことがあり、計量的手法のものが多く出たが、それほどの成果はなかったように思われる。本稿は文体論の対照言語学的研究の道を開く<sup>さきがけ</sup>ではないかと思量する。広くは比較文化研究の基礎を支える研究である。今回の村上春樹著『ノルウェイの森』の中国語訳との対照についての考察によって、とりわけ印象的であり具体的に確認できたのは、『ノルウェイの森』と中国語訳という具体的対照研究でも、日本語表現の方が中国語表現に比べて受身表現が多く、使役表現が少ないことである。

翻訳作品を資料として言語的分析を行うことには客観性の点から疑問を呈する人もいるであろうが、筆者はパロールを重視する立場に立ち、パロールあつてのラングであり、その逆ではないと思う。「理論」と「実際」「事実」についても「理論」(文法など)よりは「実際」「事実」の立場≡具体的事実、頻度数等を重視した研究も必要であろう。こうしたことは普遍性に対する個別性、理論と現実といったような似通った問題を想起させる。「理論」と「実際」「事実」両面からの考察が全体像の解明のために必要とされると考える次第である。

## 【注】

- 1) 村上春樹 (2004) 『ノルウェイの森 (上)』講談社 講談社文庫 (2010年12月27日第43刷発行) を使用。同 (2004) 『ノルウェイの森 (下)』講談社 講談社文庫 (2010年10月28日第37刷発行) を使用。
- 2) 林少華譯 (2007) 《挪威的森林》上海譯文出版社を使用。
- 3) 言語教育面でも、たとえば中国語の「受身」「使役」を文法的な理論的側面からだけ説明するだけでは不十分で、具体的実際、具体的事実として、日本語と中国語の対照において、日本語の「受身」「使役」がどのように中国語の「受身」「使役」として表現され、また表現されないかを研究し、提示する必要がある。
- 4) ( ) 内の数字は個数を表す。
- 5) 次のような場合は二字の動詞のように思えなくても前後のものと合わせて二字のまとまりと考えられるもの (ex. “被迫” “被人说是” “被～一劝” “北风一吹”) である。「大学が封鎖されて講義はなくなったので、～」(『上』p.89) → “大学被迫关门后没有课上了、～” (p.55)。「しゃべり方が変わってるなんて言われたのは本当にそれがはじめてだったのだ。」(『上』p.113) → “说话方式被人说是与众不同, 这还真是第一遭。” (p.70)。「そう言われると私、それ以上何も言えなかったわ。」(『下』p.31) → “被他如此一劝, 我不好再说什么了、～” (p.209)。「～、それが風に吹かれて山の斜面を彷徨していた。」(『下』p.40) → “～, 被风一吹, 在山坡前彷徨不定。” (p.214)。
- 6) 楊凱榮 (1989) pp.55-56
- 7) 中国語話者は連体修飾節内では受身形の使用が少ないことについては曹娜 (2012) 日本比較文化学会 (2012.1.31) 所収 pp.61-74 に言及がある。
- 8) 藤田 (2007) pp.57-61
- 9) 張麟声 (2001) p.123
- 10) 張麟声 (2001) p.131-135
- 11) 楊凱榮 (1989) p.167
- 12) 藤田 (2007) pp.105-115
- 13) 藤田 (2007) pp.107-109
- 14) 藤田 (2007) pp.96-97

## 【引用文献・参考文献】

- 楊凱榮 (1989) 『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』くろしお出版  
藤田昌志 (2007) 『日中対照表現論一付：中国語を母語とする日本語学習者の誤用について一』白帝社  
張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク

曹娜（2012）「中国語話者による書き言葉における日本語の受身形の使用状況－構文上及び意味上の  
特徴に注目して－」日本比較文化学会（2012.1.31）所収  
日本比較文化学会（2012.1.31）『比較文化研究』No.100